

Jones, Owen

The grammar of ornament, illustrated by examples from various styles of ornament.

London, Day and Son, 1856. 1vol. 100 plates (litho. col., mono). 58×39cm.
〈K757. 7-J〉 文献番号 8-47

ジョーンズ, オーウエン『装飾の文法』

本書は、19世紀イギリスの建築家、オーウエン・ジョーンズ(1809-74)の著作である。18世紀後半に端を発したイギリスの産業革命は1830年代に一応の終結をみたといわれる。産業革命がもたらした機械化と工業化の波は、量産される工業製産品にほどこすべき装飾の需要を惹起した。ただその需要にこたえるべき装飾の伝統と技術に習熟した職人層は、ヨーロッパにおける近代の幕開けとともに解体し、装飾芸術の衰退は、特に国の基幹産業である繊維産業においてフランスと競合関係にあったイギリスにとって由々しき問題となっていた。この問題に対処すべくイギリスは早くも1837年、政府直轄のデザイン教育機関スクール・オブ・デザインを開設し産業デザインの改革を図ったが、イギリスが1851年、工業先進国としての威信にかけてロンドンで開催した第1回万国博覧会(正式名称は、The Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations)においてもなお、顕著な改善はみられなかった。

『装飾の文法』は、このようなイギリス産業界の状況を背景として生まれた、装飾の百科事典ともいべき装飾文様図版集で、本書はその初版である。19世紀後半、ヨーロッパでは装飾図版集が数多く発刊されたが、『装飾の文法』はそのような図版集に先鞭をつけたものであるとともに、石版による多色印刷図版集のさきがけとしても注目される。

本書の図版はオセアニアの原住民の織物や木彫装飾にはじまる。ジョーンズが装飾を、文化の違いを超えて人間の普遍的な営みとしてとらえようとしたことを示す。次いで、エジプト・アッシリアとペルシア・ギリシア・ポンペイ・ローマ・ビザンチン・アラビア・トルコ・アルハンブラのムーア式装飾・ペルシア・インド・ヒンズー・中国・ケルト・地中海・ルネッサンス・エリザベス朝・イタリアの19章それぞれに図版が添えられ、第20章の「自然にみる葉と花」の章で締めくくられる。ジョーンズの世界の装飾文様に関する幅広い知見をもとに、各章の図版の前には解説が付され、添えられた図版は色刷りのものだけで総数2000点を超える。このようにジョーンズが、多岐にわたる多数の装飾図版を収録したのは、多くの装飾文様から装飾構成の原理を導くことを意図したためである。それは図版に先立ってまず、「一この文献全体を通じて提唱される一建築と装飾芸術における形と色彩の構成に関する一般原則」General principles in the arrangement of form and colour, in architecture and the decorative arts, which are advocated throughout this work と題した37項目の命題が列記されていることによく現われている。

1851年の世界初の万博にジョーンズは建築と内装の監督として参画し、有名な万博パビリオン、クリスタルパレスの内装を手がけるにあたっては、その色彩計画をジョージ・フィールドの色彩理論(文献番号9-10, 9-10-②)に依拠している。この万博でイギリス展示品は、工業製品として価格面では優位にあるものの、デザイン面での近隣諸国への立ち後れがあらわになる。万博開催の翌1852年、マルバラハウスにおいて、芸術・工業・商業協会主催の「1851年大博覧会の成果に関する講演」と題した講演会が開催された。この時、万博の立役者ヘンリー・コール(Sir Henry Cole)やディグビー・ワイアット(Sir M. D. Wyatt)らとともに、ジョーンズも「装飾芸術における色彩」のタイトルで講演をおこなっている。ジョーンズはまずイギリス装飾芸術の色彩は、近隣ヨーロッパ諸国のみならず東方の諸国からもはるかに立ち後れていると指摘し、その原因は“われわれに、装飾の適用と配色についての原則が欠けている”点にあるという。続けて講演ではシュヴルールと、特にフィールドの理論にもとづいた配色に関する22項目の命題がかかげられ、各命題には個別的に詳しい説明が付け加えられている。

『装飾の文法』の冒頭に掲げられた37項目の命題は、この講演で示された命題と重なっている。このことと、『装飾の文法』に世界各地の装飾が集大成されていることを合わせて考えると、『装飾の文法』が1851年万博の反省をもとに、ジョーンズがイギリス装飾芸術の再興をかけ、石版多色印刷の粋をつくしてまとめあげた労作であったことがわかる。講演の命題22項目は色彩がテーマであったが、『装飾の文法』の命題では、形態への提言が新たに加えられた。命題10には“形態の調和は適切なバランスと、直線と斜線と曲線の対比により成る”とある。これはフィールドの『色彩論』(文献資料9-10-②)における形態の“三原形”，すなわち直線・折れ線・曲線と対応し、ジョーンズの命題がフィールドの『色彩論』(1845)に示唆されていたことを物語っている。

『装飾の文法』は1856年、London: Day and Sonによる大型二つ折り判(本書)が、また同年、図版が追加された四つ折り判が発刊された。四つ折り判は1868年、London: Quaritchから再版され、このQuaritch版をもとに、1910年と1928年にもリプリント版が出ている。戦後は1972年のNew York: Van Nostrand Reinhold版、また1986年にLondon: Studio Editions版、およびNew York: Portland House版、さらに1987年New York: Dover版など再版がかさねられ、最近ではOctavo社のCD-ROM版でもみることができる。

邦訳版では、オーウェン・ジョーンズ編著、『世界装飾文様2020』1, 2, 学習研究社1987年がある。(緒方)